昭和ノスタルジー

未通海女（おぼこ）哭虐

裸の昼と縄の夜

前　編

濠門長恭

目次

登場人物……3
見習海女は裸……4
・鬼伯母の棲まう島……4
・便所も風呂も浜辺……7
・食事の作法も屈辱……10
・十五年ぶりの見習……13
・実核を括る色付紐……20
・漁師へのお披露目……23
・苛酷な素潜り練習……27
・強いられた裸生活……34
・亡母の遺骨が人質……43
・理不尽な折檻甘受……50
・折檻肌で海女練習……57
・ひとりきりで買物……66
・厳しさを増す練習……76
・初潮は新たな恥辱……85

・海女漁鑑札の代償……91
折檻と輪姦と……102
・海女稼ぎの厳しさ……102
・従兄との鉢合わせ……107
・従兄を誘惑した罰……111
・従兄従妹は釜の味……123
・かいま見えた真相……128
・病気だけが休み時……132
・独りだけの娘小屋……137
・直立大股開きの鞭……149
・緊縛放置集団夜這……156
・娘ひとりに穴三つ……161
・不浄期間に猛勉強……166
後書き　168

登場人物

白石久美子　母を交通事故で失って孤児となり、母の実家に引き取られた
浜崎和子　伯母。妹（久美子の母）を逆恨みしている。亭主を見下している。
浜崎勝利　入り婿。孕んでいる和子を押しつけられた。名目上は浜一番の網元。
浜崎秀一　浜崎家の長男。久美子と同学年。妹がいるが、物語には登場しない。
岸辺花江　浜崎家の女中。和子のお気に入り。
船中京子　浜崎家の女中。花江より若いだけに、久美子に同情している。
田中ハツ　ベテランの海女。久美子に同情的だが、網元には逆らえない。
川中弓枝　夫婦で都落ち（義祖父が島の出身）して、雑貨屋を営む。五歳児の母。夫と死別。

見習海女は裸

・鬼伯母の棲まう島

白石久美子は、父の形見のトランクひとつを持って島の桟橋に降り立った。今日からはこの島で暮らすのだ。もう、母の初七日は明けた。まさか四十九日まで、めそめそしているわけにもいかない。

「帰って来たんだよ、母さん」

トランクに収まっている母に、声に出して語りかけた。母は生まれ育った島のことをほとんど語ってくれなかった。あまり良い思い出を持っていなかったらしい。因習にとらわれた漁師村と言っていたけれど、海岸沿いに並んだ三十軒ほどの家並みは、村というより商店街の印象だった。所得倍増計画のおかげだろうか。もっとも。来年は国際オリムピックが開かれるというので、東京から遠く離れた地方まで、外国人観光客を当て込んだ建設ラッシュが続いている。それに比べれば、実にささやかな街並だった。

少女は海風に吹き流される三つ編みのおさげを後ろへなでつけてから歩き出した。年齢の割に華奢な身体つきのせいもあって、少女がトランクを提げているのか、トランクが少女を引きずっているのか、判然としない。細い眉と小さいがぷっくりした唇は美少女の条件かもしれないが、久美子の場合は『薄幸の』という形容がつきまとう。

もらっている簡単な地図に従って、海岸前の街並を抜けて一キロほど歩くと、古びた漁村に着いた。伯母の家は、人に尋ねるまでもなかった。小高い丘の上で広い生垣に囲まれた、威風あたりをなぎ払うお屋敷だった。ここまでも潮の匂いが風に乗って来る。六月に暦が替わって、夏を思わせる熱気。爽やかな中にも生臭さが混じっていた。

「ごめんください。今日からお世話になる白石久美子です」

大声で呼ばわると、一度だけ会ったことのある伯母とは違う婦人が奥から出てきた。

「いったん敷地の外へ出て、裏木戸から勝手口へまわってくださいな。玄関口は、お客様を迎えるところです」

因習という母の言葉が頭をかすめたけれど、それを格式と訂正して、久美子は素直に言葉に従った。

「それにしても、大きなお屋敷だわ」

生垣沿いに歩いて裏へまわりながら、久美子は感嘆した。

伯母の家は島いちばんの網元だと聞かされていたけれど、こんなに羽振りがいいとは想像もしていなかった。これなら、自分ひとりくらいそんなに負担にならないだろう。

心強く思ったのだが――それは五分と続かなかった。

裏木戸から敷地に足を踏み入れて。勝手口までは十メートルほどもあった。

勝手口が開いて、さきほどの婦人が露払いをする形で伯父夫婦が出迎えてくれた。伯父とは初対面だった。伯母よりも背は頭ひとつほども高いが、そんなに痩せてもいないのに貧相な印象だった。

「初めまして。今日からお世話になる白石久美子です」

久美子はていねいに頭を下げたのだが、予想外の言葉が伯母から返ってきた。
「居候の穀つぶしのくせして、突っ立ったまま挨拶するのかい」
「あ、いえ……ちゃんとしたご挨拶は家に上がってからさせていただきます」
面食らいながらも取り繕ったのだが、さらに追い打ちがきた。
「妹と浜崎の家は絶縁してるんだからね。家に上げるわけにはいかないよ」
久美子は、自分の耳を疑った。
他に頼れるところもないのでしょう。うちで面倒見てあげるわよ。運送会社との交渉も、家の明け渡しも、みんなうちの方でやってあげる――あの優しい言葉は、なんだったのだろう。
「あとは、わしが始末をつけますから」
そうかい、それじゃ――口の中でもごもご言うと、伯父は使用人らしい婦人に押し込まれるようにして、家の中へ引っ込んだ。
「こっちへおいで」
伯母が裏庭に出て、片隅にある小屋へ久美子を連れて行った。
「物置に使っていたんだけどね。おまえのために明けてやったよ」
ひと間きりの小屋は、ひどく殺風景だった。物置だったのだから畳ではなく、土間に筵(むしろ)が敷かれていた。三段に積んである木のミカン箱は整理箪笥の代わりだろうか。勉強机ではなく学校で使う、それも壊れかけたのに板を打ちつけた机と椅子が置いてある。部屋の隅で小さな山になっている藁が、まさか寝床ではないだろう。けれど、布団は見当たらなかった。そして、照明は天井から吊るされた裸電球が、ひとつきり。

「おまんまは、沓脱石（くつぬぎいし）の脇に置くからね。声を掛けたら、すぐに取るんだよ」
ほんとうに金輪際自分を家に入れるつもりはないのだと、久美子は思い知った。

・便所も風呂も浜辺

「あ……」
「なんだい？　素っ頓狂な声をあげて」
「あの……お手洗いは、どうすれば良いのでしょう。それと、お風呂も」
家にはいらなければ、どちらも使えない。
「図々しい子だね。すぐそこに海があるじゃないか」
「……」
久美子は絶句するしかなかった。
「最後に井戸で海水を流しな。だけど、桶に一杯きりだよ。じゃぶじゃぶ使われちゃ、井戸が枯れちまう」
「……はい」
目上の人の言葉に逆らってはいけない。学校でも母からも厳しく躾けられている。
「ああ、それからね。わしのことは女将さんって呼ぶんだよ」
女性が一人称に『わし』を使うのを耳にしたのは初めてだった。
「うちの亭主は、主（ぬし）様。息子は、若主様。娘は、お嬢様。女中は、花江さんと京子さん。

女中といえども、穀つぶしのおまえより身分は上なんだからね。言葉づかいには気をつけるんだよ」

言い終えると、伯母はさっさと家へ戻った。

ひとり残されて、久美子は途方に暮れていた。

伯母の言うとおり。久美子には行くところがない。過労が元で久美子が幼いときに亡くなった父は、田舎の漁師の娘と駆け落ちして大学まで辞めたので、両親から勘当されている。父方の人間は、だれひとり母の葬儀に来てくれなかった。ただひとり手を差し伸べてくれた母の姉からは、手の平を返したような仕打ち。それでも、これしきのことで恨むつもりはない。もしも伯母が弁護士を雇って運送会社と交渉してくれなければ、遅延損害金とか車の買い替え（人をひき殺した車なんか、誰だって使いたくない）とかで、途方もない借金を背負うところだったのだ。

※現在の常識でいえば、とんでもない言いがかりだが。さすがに昭和三十年代ではないが、筆者も似たような体験をしている。自転車でふらついて、接触事故。

「うちは新車なんだ。修理費を寄越せ」

警官が呼ばれて。

「道交法（自転車を追い越すときは、十分な距離を保つ）違反は、自動車のほうだ」でケリはついたのだが。さらに昔であれば、庶民に法律知識が無いのを良いことに、こういう無法を押し通そうとした企業があったことは想像に難くない。

小説に戻ろう。

こうやって、住むところもあるし、食べさせてももらえる。家族と同様の扱いを求めるのは身の程知らずというものだ。

久美子は気を取り直して、荷物の整理を始めた。といっても、父の形見のトランクひとつに詰めてきたのは、当面の着替えと学校の制服と母の骨壺と遺影と、形見の手鏡と櫛。そして、教科書とノートと文房具一式。季節外れの服（普段着も含めて五着しか持っていなかった）や母の衣類と大きな額に収まっている父の遺影は、別便で送ってもらう手筈になっていた。

着替えをミカン箱に分けて入れて（スカスカだ）、教科書とノートを机の右に積み上げ、母の遺影と手の平に乗る大きさの骨壺を左側に置いたら、それでおしまい。

ひと段落したら、急に生理的欲求がつのってきた。

小学校の遠足でも、そういうことはしたことがあるんだから。と、自分を説得して。久美子は手拭いを持って外に出た。裏木戸から出てぐるりと生垣をまわれば、目の前に海が見下ろせた。

道を下りる途中で、何人かと行き合ったのだが。まるで久美子を無視している感じだった。久美子のほうでも、知らない人にまで挨拶する習慣はない。ちょっとだけ頭を下げて、無言ですれ違った。

来たときに気づいていたのだが、道の先は漁船の溜まり場になっている。漁師がいるし、奥さんたちもいた。自分よりすこし年上の娘さんたちも何人か。その人たちにも会釈をして、浜辺にそって百メートルほど歩くと小さな岬があった。その裏手には人影もなかった。

あたりを気にしながら波打ち際まで行って、裸足になった。小さな女の子が水遊びをするときのように、スカートをたくし上げて、裾を腰回りで結び留めた。もう一度道を振り返ってから、ズロースを脱いで手拭いを持って、足首まで海に浸かった。しゃがんで、大急ぎで用を足した。こらえていた小水を出すときの心地良さに重なって、惨めさがつのる。

手に水を掬って、汚れた部分を洗った。これから先のことを考えると、チリ紙も無駄にはできないように思ったので手拭いで我慢して、ズロースを穿いてスカートを元に戻した。

用を足すのはこのやり方ですむけれど、身体を洗うときは裸にならなければならない。夜にこっそりと来るしかないだろう。

来た道を引き返しかけて、久美子は視界がにじんでいるのに気づいた。勝手に涙があふれていたのだった。

・食事の作法も屈辱

涙をぬぐって。すぐ物置小屋へ帰る気にはなれなかった。すくなくとも来年の春までは ここで暮らすのだから、あちこちを見ておこう。とりあえずは、さっきの船溜まりへ。網元の家でお世話になるのだから、あの人たちもまったくの他人ではない。

そんなことを考えていたのだが、半分も歩くうちに足が止まってしまった。何人かの人が裸なのだった。男みたいに褌を締めて胸は剥き出しにした女性と、割烹着を着たお年寄りとが談笑している。

ああ、海女さんなんだと、久美子は判断した。電気屋の店先に展示してあるテレビで、ドキュメンタリーを観た記憶があった。逆に言えば、テレビで取り上げられるほど、裸で潜る海女さんの数は減っている。ふたたび、因習という単語が頭をかすめた。

女の人が裸なのは、いちおう納得したけれど。若い男の人も、何人かが裸だった。良く見ると、褌も締めていない。股間の黒々とした陰りも、そこから垂れている肉色の棒も、はっきりと見えて。久美子は、あわてて目をそらした。

治まらない動悸を抱えて、来たときと同じように軽く会釈をしただけで、船溜まりの前は足早に通り過ぎた。衝撃が強すぎて街を探訪する興味も失せてしまい、久美子はまっすぐ家に帰った。さっきの様子では、裏庭をうろついても叱られそうだったので、小さな机に座って教科書を広げた。忌引きの明けた日に一度学校へ行って、転校することを級友に告げて。この十日間、まったく授業を受けていない。その分を取り返さなくては。

ボオオオオオオーッ！

汽笛が聞こえた。久美子を運んで来た定期船が荷役を終えて、出港する合図だ。船便は一日に一本しかない。午前九時に本土を出港して、十一時に島に着く。島で自給できない食品や日常雑貨を卸して、わずかな荷――ほとんどは、翌朝の競りにかける海産物を積んで、午後三時に島をはなれる。

久美子は、汽笛に負けないくらい盛大にお腹が鳴るのを感じた。こちらで食べさせてもらえると思い込んでいたのに、あてがはずれた。けれど、さっきの伯母の様子では、食事を催促したりすると、どれほど厭味を言われるかわからない。久美子は広げた教科書の一ページをぼんやり眺めて、物思いに沈んだ。

六月の遅い夕暮れが小屋の中を薄暗くした頃に。
「久美子さん、お食事ですよ」
聞いたことのない女性の声だった。二人いる女中のうちの、久美子を出迎えていないほうの人だろう。
外に出てみると、伯母が言ったとおりに、勝手口の前に小さなお盆が置かれていた。茶碗に大盛りのご飯と大根と煮付けた魚とお新香。お盆の横に小さな薬缶もあった。二度に分けて運ぼうと思って、まずお盆を取り上げて小屋へ引き返しかけた。
「お行儀の悪い子だね」
尖った声に足を止めて振り向くと、伯母が恐い顔で立っていた。
「おまんまを恵んでやってるんだよ。ありがとうございますの一言もないのかい」
恵んでやるという言い方にはカチンときたけれど。たしかに伯母の言うとおりだった。久美子は向き直って、深々と頭を下げた。
「ごめんなさい。身寄りの無いあたしを引き取ってくださって、そのうえご飯まで食べさせてくださる伯母様と……」
「女将さん、だよ」
「……女将さんと主様には、ほんとうに感謝しています。ありがとうございます。ご飯をいただきます」
本気で感謝はしているけれど、言葉の端に皮肉が顔を出してしまった。しかし、伯母は気づかなかったようだ。
「わかりゃいいんだよ」

バタンと勝手口が閉まった。
育ち盛りの少女には、内心の鬱屈など関係ない。
「いただきます」
と言った十分後には、茶碗もお皿も空っぽになっていた。いくら山盛りでも、飯茶碗に一杯きりでは、まったく物足りなかった。もしかしたら、朝までお茶をもらえないかもしれないと考えて、飯茶碗に二杯も飲んでしまってから、そのぶん海岸まで足を運ぶ回数が増えると気づいた。
元の位置へお盆と薬缶を返して。勝手口を小さく開けて、お礼を言った。
「ありがとうございました。とてもおいしかったです」
返事はなかったけれど、恐い顔も現われなかった。

・十五年ぶりの見習

広い家だから、家の中の物音は小屋まで聞こえてこない。時刻からして、二人の子供（久美子にとっては従兄妹）は帰っているだろうし、伯父は網元だから、もしかしたらずっと家にいるのかもしれない。けれど、家族に紹介される気配もなかった。
それに。いつから学校へ行くかという話もない。
飼い殺しなんて言葉まで、頭に浮かんだ。
こちらから声を掛けてみようか。でも、また叱られるかもしれない。穀つぶしの居候は、

おとなしくしているのが無難かな。そんな後ろ向きなことを考えているときだった。
ぎしぎしと敷居を軋ませて、引き戸が開いた。伯母だった。
どのように振る舞うべきか見当もつかなかったので、とりあえず立ち上がって出迎えた。
「おまえも、面と向かって穀つぶしなんて言われちゃ、居心地悪いだろ」
「いえ……ほんとうのことですから」
卑下したつもりだったが、伯母の癪にさわったらしい。
「穀つぶしを養ってるとあっちゃ、わしらの面子が丸つぶれなんだよっ」
「……卒業したら、働いてご恩返しをしますから」
「そんな先の話をするんじゃないよ。おまえらの年頃じゃ、漁を手伝ってる子は何人もいるんだからね」
昼に見た、裸の海女さんの姿が頭に浮かんだ。と同時に。あの場にいたいちばん若い人でも、とっくに卒業している年齢に見えたことも。
「海女になりな」
伯母が口調をやわらげた。しかし、言っていることは無理難題だった。久美子は泳げるが、素潜りなんかしたことはない。それよりも。あんな小さな褌ひとつで人前に出るなんて、とてもできない。
「わしだって、おまえの年頃には海女稼ぎをしてたんだよ。網元の跡取りが漁もできないなんて、みっともないじゃないか」
このひとなら、昔は海女さんだったと言われても妙に納得できる。わりとがっしりした体格だから、何分でも潜っていられたのかもしれない。ふっと、母の姿が頭に浮かんだ。

ふたりが姉妹だとは思えないほど、母は細かった。器量は、この人とは比べものにならないけれど。

「それじゃ……母も、海女さんを」

していたのですかと尋ねる前に。

バシイン。

頬桁を張られて、久美子は横ざまに倒れた。それほどに凄まじい平手打ちだった。驚きと痛みとで動けないでいると、襟首をつかんで引き起こされた。

バシン、バシン。

最初のほどではなかったが、それでも学校の先生からいただくビンタよりは、ずっと痛かった。

「二度と、あの女のことは口にするんじゃないよっ。わしの許婚者（いいなずけ）を寝取ったうえに、家の金を盗んだんだからね。義絶されて当然さね」

初めて聞かされた母の所業を、久美子は信じられなかった。幼いときの記憶しかないが、父はそんなに不実な人ではないと思う。盗んだお金が幾らかは知らないけれど、それなら、病気になるほど無理をして働かなくても良かったのではないだろうか。けれど。今となっては真相を知っているのは伯母しかいない。全部が真実ではなくても、母は伯母に恨まれるような何かをしでかしたのだろう。

「あいつは、あいつ。別におまえまで憎んでいるわけじゃないよ」

伯母の声が、またやわらかくなった。

「もう働ける年頃なんだから、ちゃんと務めを果たせって言ってるだけだよ」

なにかほかにできる仕事はないだろうかと考えたが、家事手伝い以上のことはできそうになかった。
「あの……この家では、女中さんを雇ってますよね。あたしが代わりになれないでしょうか」
バシン。
またビンタを張られた。
「他人様の仕事を奪おうってのかい。母親が母親なら、娘も娘だね」
「ごめんなさい。そういうつもりじゃなかったんです」
じゃあ、どういうつもりだったんだと問われて、返答に詰まる。
伯母が、やわらかく諭すように言う。
「海女なら、村全体の収穫が増えるんだから、誰からも恨まれないよ。もちろん、すぐには海女稼ぎなんてできないだろうから、せめて半人前くらいになるまでは、わしがきっちり教え込んでやるよ」
でも、まだ学校で勉強しなければいけない年齢なのだ。
「学校は……休むんですか？」
「朝から晩まで働けってんじゃないよ。海女漁には潮目がある。月の半分くらいに二時間か三時間の海女稼ぎをして、残った時間で学校へ行けばいいだろ」
すべての逃げ道を封じられたと、久美子は観念した。
母の罪を償うためにも、働かなければならない。学校は遅刻したり早退したりになるけれど、家で勉強して取り返せるだろう。そして、褌ひとつの裸体を、男の人を含めた他人

に晒すのも、それがここの習慣なら、我慢しなければならない。考えてみれば、プールの授業だって、身体の線を男子に見られている。薄い布一枚の違いだけなんだと、久美子は自分を無理矢理に納得させた。

「わかりました。海女さんになります。女将さん、どうかよろしく教えてください」

久美子は両手を前にそろえて、深々と身体を追った。理不尽な仕打ちを受ける悔しさに、涙がにじんできた。けれど、涙を流すのはまだ早すぎたのだった。

「そうかい。ああ、良かった。これで、島の伝統も守られるよ」

「え……？」

「この十五年ばかし、海女になる者がいなかったんだよ。今じゃ大年増ばかりさ。若いおまえが伝統を受け継いでくれて、ありがたいよ」

では、学校へ行っている女の子は、誰も海女漁をしていないのか。久美子は、騙されたような気分になった。

「それじゃ、さっそくだけど。ちょっと裸になってごらん」

急な展開に、久美子は頭がついていかない。

「え……？」

「おまえは、まだまだ身体が出来ていない。どこまで仕込めそうか見定めないことにはね」

そういうものかと、思った。明日からは褌ひとつの裸を男の人にまで見られるのだから、同性の肉親に見られるくらい何でもない。久美子は立ち上がって、ブラウスとスカートを脱いだ。シュミーズも、わりに平然と脱げた。

「おやまあ。乳バンドなんか着けてるのかい。変に色気づいてるね。さすがは、淫らな女

の娘だねえ」
「母のことは口にしないんじゃなかったんですか」
伯母が右手を上げた。
びくっと両手を顔の前にかざした久美子だったが。
「なんだい、その真似は。逆らおうってのかい」
とがった声で言われて、しぶしぶと久美子は手を下ろした。
伯母の手が動くのが目の隅に映って。
バチイン！
目の前で火花が飛び散ったほどの凄まじいビンタだった。
ガシン！
往復ビンタではなく、二発目は拳骨だった。
「これからは、口答えするんじゃないよ。わかったね」
「……はい」
嫁いびりとはよく聞く話だけど、これほど理不尽ではないと思う。
「さっさと、乳バンドもズロースも脱いじまいな」
「え……いえ、わかりました」
肉の着き方とかは、このままでもじゅうぶんにわかるはずだけれど。もう叩かれたくなかった。久美子は羞恥と屈辱とに指を震わせながら、素裸になった。
「ああ、やっぱりだね。もう、淫らな毛を生やしている」
当然だと、久美子は内心で反発する。自分くらいの年頃で、まだ下が子供のような娘な

んか、銭湯で見かけたことがなかった。
伯母が帯の間から剃刀を取り出して、机の上に置いた。
「そんな見苦しいものは、全部剃っちまいな。明日の朝もそのままだったら、そこの樹から吊るして、亭主に折檻してもらうからね」
久美子は震えあがった。その折檻というのは、ビンタくらいではすまないだろう。だいいち、樹から吊るされるなんて、まるで西部劇のリンチだ。
伯母が小屋から出て行ってからも、久美子は呆然と立ち尽くしていた。ぼろぼろと涙をこぼしていた。
いつまでも、こうしているわけにもいかない。久美子は、さすがにスカートだけは穿いて、外に出た。井戸は裏庭のまん中にある。ガッチャガッチャとポンプを押して、井戸屋根の軒下に吊るされている手桶のひとつに半分ほど水を汲んだ。
持ち帰って。部屋中を見回して。片付け忘れたのか、荒縄の束とか折れた物干し竿とかがひと隅につくねられていたが、新聞紙のようなものはなかった。
仕方がないので、引き戸の前の剥き出しの土間に立って、スカートを脱いだ。水で下腹を湿らせてから、そこに剃刀を当てた。
ざりっ……音ではなく、肌の感触だった。
剃刀を数度往復させると、上からのぞき込んだかぎりでは無毛になっていた。しかし手鏡に映してみると、割れ目のまわりにかなり残っている。ちょっと考えてから、椅子を引き戸の前まで持ってきて、電球に向かって座り、大きく脚を広げた。複雑に入り組んだ襞を切らないよう、おそるおそる剃刀を動かした。

そうして十分以上もかけて、久美子は自分を辱めたのだった。

・実核を括る色付紐

まだ薄暗いうちから、叩き起こされた。

「さっさと起きて支度しな。今日から厳しく仕込んでやるよ」

寝ぼけまなこのまま、身体を起こして。久美子は目を見張った。眠気が吹き飛んだ。伯母は、素肌に褌を締めていた。もっとも、法被を着ているから昨日の海女さんと違って胸は隠れていたが。

「裸になって、これを締めな」

目の前に白い布が投げられた。褌の締め方なんか知らなかったけれど、とにかくパジャマを脱いだ。伯母の言う裸とは素裸のことだと、もう覚えているので、ズロースも脱いだ。

白い布を手に取ってみると、幅は十五センチちょっとで長さは一メートルもない。褌にしては短いのではないかと首をかしげていると。

「腰に巻くんだよ」

立ち上がって腰にぐるりと巻いた。言われるままに後ろで結んだ。まるでプール授業みたいだと、久美子は思った。溺れかけたときは、先生がこの帯をつかんで引き上げてくれる。

「それが、見習海女の褌さ」

「でも、これ……あの……」
男子の猥談が聞こえてしまって、オソソとかオ●ンコとかいう言葉は漠然と知っていたが、まさか乙女が口にしていい言葉ではない。
「あの……大事なところが見えています」
伯母がきつい顔になって、無言で手を上げた。
「ごめんなさい。もう言いません。ぶたないでください」
頬はまだ腫れて、ずきずき疼いている。
「だいぶん素直になったね」
伯母は手を下ろしたが。ああ、そうそうと言って、自分の褌に絡めていた紐を抜き取った。
「大事なことを忘れるところだった。脚を広げな」
わけがわからないまま、言葉に従う。
伯母が久美子の前に片膝を突いて。いきなり割れ目を指で穿った。
「きゃあっ……」
跳びすさった久美子だったが。伯母ににらまれて、元の位置へ戻った。
「あの……？」
「動くんじゃないよ。手元が狂う」
また割れ目を穿たれて。その指がつうっと上に動くと。
「ひゃんっ……」
電気のような感覚が腰を突き抜けた。痛いとか不快とかではなく、わけのわからない衝

撃だった。
「動くなと言ってるだろ」
割れ目の上端あたりを、指でピチッと弾かれた。
「きゃあっ……」
今度は鋭い激痛に貫かれた。股間を両手で押さえて、久美子はその場にうずくまった。
「そんなに、樹に吊るされて折檻されたいのかい」
低い声で言われては、立つしかなかった。
どんなに痛くてもじっと我慢していようと、覚悟をきめたのだが。再び不快ではない電撃を受けて、微妙に腰がくねってしまった。
「もう感じてるのかい。まったく淫乱だね」
どういう意味か、久美子にはわからない。
そのうち……にょるんと、何かが滑るような感触があった。さらに電撃が走る。その電撃は、はっきりと甘かった。
そして。今度は、下腹部のどこかを鋭く引き絞られた。
伯母は指先に唾を吐いてこすり合わせ、それをわざわざ久美子の背中で拭いた。そんな屈辱的な仕打ちにも、久美子は黙って耐えている。
「自分で見てみな」
手鏡を持たされて。久美子は自分の秘所を目の当たりにした。そんな物が自分の中に隠れていたなんて知らなかった小さな突起が、赤い紐で括られていた。括られた根元には、突起を包んでいた皮がたくれ上がっている。

「それが、浜崎講の目印さ。いくら見習でも、どこの網元にも属していない者には、海女の真似事をさせられないからね」
あっと、久美子は思い出した。あわてて目をそらしたけれど、素裸だった男性は、たしか肉棒の先を赤い紐で括っていた。
こんな格好にされて惨めだとか恥かしいとか思ったら、あの人たちに失礼だ。そんなふうに、久美子は（強引に）自分に言い聞かせるのだった。

・漁師へのお披露目

久美子は法被なんか与えられなかった。素裸で腰に晒布を巻き、肉芽を赤い紐で括られた珍妙な姿で、外へ引き出された。いや、正確にいえば、二か所だけは肌をさらしていなかった。ひとつは頭だ。潜るときの邪魔になるからと、三つ編みのお下げは頭の後ろでゆわかれて、『浜崎』の文字がはいった手拭いで包まれている。これがあるなら目印の赤い紐なんかいらないのにと、久美子は不満に思った。
もう一か所は足。学校でも日常でも履いている運動靴は、禁じられた。
「褌に運動靴は似合わないよ。だいいち、砂浜を歩くと靴の中に砂が溜まる」
黒いサンダルのような履物を与えられた。草履にしては厚いがゴムサンダルほどではない。楕円形の黒い板に鼻緒がすげられていて、脱げないように足首を括る紐が付いている。それが古タイヤの廃物利用だと気づくのは、数日後のことになる。

いっぽう、伯母は。踵のところまでしかない和足袋のような履物だった。
「さあ、行くよ」
威風堂々といった感じで、伯母は歩く。着物をきていたときより、歩幅も大きい。誰も見ていないのに、久美子は両手で胸と股間を隠して、刑場に引き出される罪人のように、とぼとぼと付いて行った。
伯母が振り返って、叱りつける。
「なんだい、そのみっともない歩き方は。一人前の海女になって稼ぐための練習に行くんだろ。胸を張って大手を振って歩きな」
目のくらむ思いで、久美子は両手を下ろした。まだ冷たい早朝の潮風が、久美子の恥かしい部分を舐めるように吹き抜けていく。
船溜まりには、二十人ほどの漁師や海女がたむろしていた。
「隠すんじゃないよ」
伯母が念押しをしてから、網元の支配下にある者たちに近づいて行く。
船溜まりの者たちは、目を丸くして二人を出迎えた。
「女将さん……現役に戻られるんですかい？」
「その後ろの娘さんは……？」
伯母は、久美子を皆の前に押し出した。
「あの淫乱泥棒女の忘れ形見さ。いつまでも穀つぶしじゃ申し訳ないから、海女稼ぎをしたいんだとさ。当分は、わしが厳しく仕込んで、せめて半人前にはしてやるさ」
「でも、その恰好は……」

「見習のうちは真っ裸。それが、仕来りだろ」
伯母が、同じように全裸の若者（見習衆）を顎で指した。
「はあ、まあ……」
もしも、久美子が羞恥に心を飛ばしていなかったら。人だかりの後ろのほうで、「戦前ならともかく……」とか「女子衆（おなごし）は……」といった言葉がささやかれているのに気づいただろう。
「お前からも仁義を切りな」
ぺちんと尻を叩かれて、久美子はしどろもどろに挨拶をした。
「浜崎さん……」
尻をつねられたので、言い直す。
「網元さんの家でお世話になっている白石久美子です。海女さんになって……穀つぶしの汚名を返上したいので……頑張ります。よろしく、お願いします」
「そりゃまあ。網元様がそういうお考えなら、うちらは何も言うことはありませんや」
「でも、海女鑑札の無いうちから、漁はさせないでくださいね」
年配の海女が、男衆よりはよほどきっぱりと、筋目を通した。
「もちろんさ。当分は、これで仕込むことにするよ」
伯母は、手にしていた海女桶から牛乳瓶を取り出した。赤く着色した水が封入されている。
「これを沈めて、拾ってこさせるのさ。漁を教えるのは、まともに潜れるようになってからの話だね」

伯母が皆を指図して、浜にどし上げてあった小さな舟を海へ出させた。膝まで海に浸かって、小船に乗り込んだ。

「グズグズしてないで、とっとと乗りな」

あわてて久美子も海にはいって、船べりをつかんで身体を引き上げた。

「舟を漕ぐのも覚えるんだよ」

伯母は漕ぎ方を口で教えながら、実際に櫓を漕いで見せた。遊園地で乗ったボートの倍以上は大きいのに、ずっと速く進む。

やってみろと言われて舟の後ろに立ったが、波に揺られてまっすぐに立っているだけが難しい。櫓は手元にある櫓柄を左手で握り、押し引きのたびに手首を返して、櫓の上面で水を押しやるのだと教えられたが――腕の曲げ伸ばしと足の踏ん張りと腰の入れ方が調和しないと、水の流れで櫓を持っていかれる。押しと引きとで櫓の角度が違っていると、舟はまっすぐ進まない。久美子が漕ぐと、公園のボートどころか玩具のポンポン船（ロウソクで小さな缶の水を沸騰させて、細いパイプから水中に噴出する蒸気の反動で進む）ほどの速さにもならなかった。

海女を乗せた同じような小舟がつぎつぎと、百メートルほど横を追い抜いて行く。どの舟も櫓を漕いでいるのは男だった。

「全部で五人。裏手の塩部んとこが三人。たった八人になっちまった」

久美子への物言いとはまるで違う、しんみりした口調で伯母がつぶやいた。

・苛酷な素潜り練習

「ここらでいいだろう」

三十分ほども漕がされてから、やっと伯母が声をかけてくれた。身体じゅうが悲鳴をあげていたし、手の平はまっ赤に腫れていた。

他の小舟は、ずっと沖合で頭を出している岩のまわりに集まっている。あの下に魚貝類が群れているのだろう。

久美子は、小さな粘土の塊を二つもらった。耳栓だった。

「深く潜ると、耳がキインと鳴って痛くなる。唾を飲み込めば治るが、それでも駄目なら、こうやって鼻に息を吹くんだよ」

伯母は指で鼻をつまんだ。

真似てみると、耳がグウンと鳴った。

「こればっかりは、痛いのを我慢しちゃいけない。中耳炎になるよ」

講釈を終えると、伯母は先ほどの赤い牛乳瓶を遠くへ投げた。

「手本を見せてやる。そこの箱メガネで覗いてな」

底辺が二十センチ四方の素通しの箱に、ガラス板が嵌められている。手に持つ水中メガネだった。

伯母は、小さな分銅をいくつも連ねた太い紐を腰に巻いた。舟べりに後ろ向きに腰掛けると、何度か深呼吸をしてから、くるんとトンボを切って海に潜った。

箱メガネで見ていると、斜め下に向かって平泳ぎで進んでいる。その先に赤い牛乳瓶が見えた。伯母は水中に浮かんだままそれを拾ったが、すぐには上がってこない。余裕を見せつけて、海底すれすれを十メートルほどカエル足だけで泳ぎ、それから縦に反転して舟の真下まで来た。そして、海底を蹴って一気に浮かび上がる。

「ヒュウーイイイイ」

悲鳴とも口笛とも違う、甲高い細い声が伯母の口から漏れた。太く息を吐くと喉を傷めるので、口をすぼめて細く強く吐き出す。それが自然と音になる。いわゆる磯笛だ。これが吹けないと一人前の海女とは認められない。

伯母は舟を大きく揺らすと、その反動を利用して身体を引き上げた。また遠くへ牛乳瓶を投げて。

「やってみな」

無雑作に言う。

久美子は船べりから身を乗り出して、片足を海に浸けようとした。ぐらりと小舟が傾いて、バシャンと投げ出された。

「きゃ……」

小さく叫んだ口に海水が押し入って、久美子はむせた。

「なにやってんだい。深呼吸で肺に空気を溜めて――そうそう。さあ、潜りな」

久美子は息を整えてから、頭を海に突っ込んで水を掻いた。けれど、ちっとも沈んでいかない。頭を水に突っ込んで、お尻を海面から突き出して、ジタバタもがいているだけだった。

「しょうがないねえ。いったん戻りな」
それもひと苦労だった。舟べりにつかまって身体を引き上げるのだが、舟が傾いて振り落とされてしまう。久美子は、伯母のやり方を思い出した。体重を掛けて舟を傾けてから身体を沈め、舟べりが高く上がったところで、水を蹴りながら一気に腕を縮めた。身体が上がり、舟べりが下がる。久美子は舟底に転げ込んだ。
伯母が海女桶の底から鎖を取り出した。
「おまえには、こっちのほうが似合いだね」
晒布の帯をほどかせて、腰に鎖を巻きつけた。後ろで両端を引き違えて、長い綱の先に着けてある金具で留めた。
「これでよし。ちゃんと拾うまで、引き上げてやらないからね」
鎖は、ずしりと腰に思い。
久美子は今度は伯母のように舟べりに腰掛けてから、トンボを切って海にはいった。背中から落ちたけれど、意に反して投げ出されたのではなかった。トンボの勢いで、自然と頭が下向きになった。
さっきの悪戦苦闘が嘘のように、ぐんぐん沈んでいく。手足で水を掻く必要もないくらいだ。これでは、海面に向かって泳いでも浮かび上がれないかもしれない。伯母の矢継ぎ早の指示がなくなったし、海の中で裸でいるのは恥ずかしいことではない。心に生まれた隙間に、恐怖が押し入ってきた。
それを払いのけて、久美子は海底を見通した。水に遮られて、視界はぼやけている。箱メガネで覗いていたときは舟の上からでも見えていた赤い牛乳瓶が、どこにも見つからな

かった。
海底に頭からぶつかりそうになったので両手を突っ張って、身体の上下を変えた。海面を見上げると、意外にくっきりと舟影が見えた。細い綱が緩く弓のようにたるんで、自分の腰まで伸びている。
潜ってから、せいぜい十秒かそこらだろうが、もう息が苦しくなってきた。一度浮上して箱メガネで、およその方角を確認しようと考えた。舟影は前が尖っているから、牛乳瓶がどこらにあるかが海底でもわかる。
久美子は海底を蹴って、上に向かって平泳ぎを始めた。ひと掻きで身体半分くらいは進む。けれど、手足を縮めているあいだに、鎖の重みで沈んでしまう。力いっぱい泳いでも、海面はなかなか近づかない。
じきに、胸と頭が痛くなってきた。手足に力がはいらない。そして。蹴った爪先が海底にぶつかった。
このままでは溺れてしまう。久美子は夢中で命綱を手繰った。が、手ごたえは弱かった。まったく身体は持ち上がらない。そして、綱の端まで手繰り寄せてしまった。浮子が結び付けられている。手を放すと綱だけが浮かび上がっていく。
伯母の冷酷な言葉が、頭によみがえった。
「拾うまで、引き上げてやらない」
でも、まさか――と思う。きっと箱メガネで見守ってくれているはずだ。いよいよとなったら、助けてくれる。けれど、見上げても舟影が揺れているだけで、伯母の姿はなかった。

その舟影が、かすんできた。頭がガンガン痛む。ほんとうに溺れてしまう。絶望が泡になって口から漏れた。大量の泡だけが、海面に向かって浮き上がっていく。
久美子は恐怖に駆られて海底を蹴った。が、何度水を掻いても、足が海底にぶつかった。
ゴボゴボゴボボッと、久美子はまた絶望を吐き出した。そのとき。グンッと腰を引っ張られた。鎖が腹に食い込んできた。
ああ、引き上げてもらえるんだ――安堵が、久美子の意識を奪った。
気がつくと、久美子は空気の中にいた。腕を後ろへ引っ張られて、背中をゆっくりと何度も押されている。
「ごぼほっ……」
咳き込んだ久美子の口から、海水が吐き出された。
「まったく手間のかかる子だね。久美子じゃなくてグズ子だよ」
伯母の鮮やかな海女ぶりを見せつけられているだけに、久美子には返す言葉がない。
伯母が櫓を操って舟の向きを変え、数回漕いだ。
「獲物は舟の真下だよ」
箱メガネで覗くと、赤い牛乳瓶に手が届きそうだった。
「さ、拾ってきな」
久美子は、まだ喘いでいる。
「ま……待ってください。もうすこし息を整えさせてください」
「あっちを見てみな」
百メートルなのか五百メートルなのか、久美子には見当がつかないが。海面から突き出

た岩のまわりに小舟が散らばって、そのすぐ近くに白いものが浮かび上がってきては、腕を伸ばして舟に何かを落とし入れているらしい。そして、すぐにまた潜っている。

「潮目の二時間で五十回は潜るんだよ。最初から怠け癖をつけさすわけにはいかないね」

一回に一分以上潜っているのだから、まさしく休み暇もない重労働だ。けれど、それは年季を積んだ一人前の海女の話だ。初心者が同じことをできるはずもない。しかし久美子は、言い返さなかった。またビンタをもらうだけだ。

久美子は大急ぎで深呼吸を繰り返した。かえって頭がクラクラしてきたけれど、船べりに腰掛けた。今度は、うまくトンボを切れた。そして、ふと疑問に思った。遠くに見た海女さんは、いちいち舟に上がらずに、その場で潜っていた。たぶん、トンボを切るのは最初だけだろうと、自分で答えを出した。まさか、伯母がわざと難しい所作をさせているとは思いもしなかった。

今度は、すぐに牛乳瓶を見つけた。それを拾うと、すぐに命綱を引いてもらえた。

「やればできるじゃないか。次は、すこし遠くへ投げるよ」

久美子は、牛乳瓶が投げられた方角とおよその距離を、頭に刻んだ。

船べりから手をはなすと、自然に沈んでいく。途中で海面を見上げて舟の向きをたしかめ、牛乳瓶の方角へ泳いだ。しかし、見当をつけていたあたりに赤い色は見えなかった。

海面を仰ぎ見ると、舟はこちらに舳先を向けて、斜め左後ろにいる。方角に間違いはない。久美子は左右を見ながらさらに進み、横へ五メートルほどずらして引き返す。

しまったなと、思った。たとえば、最初からわざと狙いを右にずらして進んでいたら、左だけを探せばよかった。見つからなければ左へ移動してUターンして、今度は右だけを

探せば良い。つぎから、そうしよう。
船影の真下にたどり着くまでに、息が続かなくなった。どうせ、溺れかけるまで引き上げてもらえないのなら、さっさと息を吐き出してしまおう。そうは思ったけれど、怖くてできなかった。結局、頭痛に襲われて目の前が暗くなって、こらえきれずに息を吐き出して――それでも、腰の鎖は引っ張られなかった。息を吸いたいという思いを必死に押さえ込んで、助けを求めて舟影を見上げた。
綱がピインと張って腰に鎖の食い込む感触で――また、久美子は気絶してしまった。
「浮かんでいる舟を目印にするから、こういうことになるんだよ」
意識を取り戻した久美子を、伯母が叱りつけた。
「落語にもあるじゃないか。渡し船で刀を落としちまった侍が、船べりに目印をつけて、後で拾おうってやつさ」
そこで、気づいた。前は左前方に見えていた岩が、今は真横に来ている。同じことが、久美子が潜ってから舟影を見上げるまでのあいだにも起きたのだろう。
「おまえは三十秒と息が続かないね。鑑札をもらったばかりの海女でも五十秒は潜るよ。わしが現役だった頃は、二分ちかかったものさ」
命綱を引いたのは、二回とも四十秒かっきりだったと、伯母が言う。ストップウォッチなんかなくても、ゆっくり数を数えることで、一分で二、三秒しか違わないのだそうだ。
「今日は、これまでにしといてやる。二回も水を吸い込んだからね。肺炎にでもなられたら、ますます物入りだ」
久美子は鎖をほどかれて、見習海女の褌と伯母が称している晒布を腰に巻いた。いっそ

何も身に着けないほうがましだと思うが、仕来りだと言われれば反論もできない。いや、文句を言ったところで、返事はビンタだ。
帰路は伯母が漕いだ。久美子が三十分かかった距離を、伯母は十分で渡った。
まっすぐ屋敷へ戻ると、伯母は久美子を残して家へはいった。
「井戸の水で潮を流しな。手桶三杯まで使わせてやるよ」

・強いられた裸生活

髪と身体を洗って、井戸屋根の梁に掛けてあった煮しめたような手拭いを使っていると、最初に姿を見せた女中が現われた。四十歳くらいかなと、久美子はあらためて観察した。ひっつめ髪のきつい顔で、割烹着姿だった。
「あんたをお医者へ連れてくよう、申し付かったわよ。ついといで」
久美子に背を向けて、裏木戸へ向かう。
「あの……着替えるまで待ってください」
女中は鼻で笑った。
「あんた、海女になるんだろ。常日頃から褌一本で暮らすのが、仕来りってもんだよ」
「……？！」
久美子は立ちくらみに襲われて、その場に膝を突いた。ひと気のない道を歩いて、同じように（男性だけど）素裸の漁師もいる溜まり場まで行くのだって、恥かしさで死んでし

まいそうだった。こんな姿で街中へ引き出されるくらいなら、あの鎖を巻いてひとりで海に飛び込んでやる。
「いやです。裸で海に出るくらいは我慢します。でも、でも……」
久美子は泣きながら訴えたが、感情が高ぶって言葉が出ない。
「京子さん、ちょっと来て」
女中が勝手口に向かって大声で呼ばわった。ずっと若い女がすぐに出てきた。同じようなひっつめ髪で、やはり和服の上に割烹着姿だった。
「縄を持ってきて。こいつの小屋ん中にあるはずよ」
京子と呼ばれた若い女中が、久美子にあてがわれた物置小屋から荒縄を取ってきた。
年配の女中が、泣きじゃくっている久美子の両手を前に引いて、荒縄で手首を縛り合わせた。
「な……なんで、縛るんですか?!」
「決まってるだろ。あんたを医者へ連れてくんだよ」
女中が縄を引っ張ったが、久美子は足を踏ん張って、動こうとしない。
「やれやれだねえ。京子さん、あなたが引っ張てちょうだいな」
年配の女中が勝手口へ消えて、すぐに長い竹尺を持って戻ってきた。久美子の後ろにまわって、竹尺を尻に叩きつけた。
ビシャアン!
「きゃあああっ……!」
思わず前へ逃げる。

「京子さん、ちゃんと引っ張りなさい」
ごめんねと小さくつぶやいてから、京子が縄を引いた。
ビシャアン！
ビシャアン！
尻を叩かれるたびに、久美子は前へ前へと逃げてしまう。そうして裏木戸から引き出されて、道を歩かされた。
いや。どれだけ叩かれようと縄を引っ張られようと、逆らって踏みとどまることは、できたかもしれない。けれど、伯母の顔が頭に浮かぶ。『樹から吊るして折檻』という、身の毛もよだつ言葉を思い出す。心をくじかれてしまう。
このまま、縄で縛られて、お尻を叩かれて引き立てられるくらいなら――久美子は妥協してしまった。
「叩かれなくても歩きます。だから……」
縄もほどいてくださいと、久美子は訴えた。
これでは、まるで時代劇の引き回しだ。それはそれで――見る人は、まさかに久美子がそれに値する罪を犯したとは思わないだろう。同情してくれるだろう。けれど、船溜まりでの出来事を考えると。伯母の威光を恐れて、久美子の味方になってくれる人はいない。
憐れまれるよりは、むしろ。古来からの仕来りを守って、みずから進んで裸身をさらしていると思われたほうが、よほど救われるのではないだろうか。久美子は、そんなふうに自分の心を偽ってしまった。
それは、つまり――後年になってＳＭという概念が認知されるようになってからは、調

教とか馴致という言葉で言い表わされる心の動きだった。
「ほんとうだね。また逆らうようだったら、女将さんに言いつけるからね。」
その結果がどうなるかは、わかりきっている。
久美子は手首の縄をほどかれて。すぐに両手で胸と下腹部を隠そうとしたが、その手を竹尺でピシャリと叩かれた。
「裸が見習海女の仕事着だよ。誇りを持って堂々と歩きなさい」
久美子は唇を噛み締めて、服を着ていると同じように――も、さすがにできず。下腹部で両手を組んで、歩き始めた。こぼれる涙は、止めようがなかった。
羞恥と屈辱とに目もくらむ思いでとぼとぼと歩きながら、さまざまな想念が久美子の脳裡をかすめた。
伯母から聞かされた女中の名前は、花江と京子。ならば、先に立って歩いている年配の女性が花江だろう。見習のあいだは素裸なんて、封建的な戦前でも考えにくい。こんな姿で街中を歩けば、お巡りさんに逮捕されるんじゃないだろうか。
久美子の懸念は、あっさりと覆された。
街が近づくにつれて、人の往来も増えてきた。誰もが、驚き呆れて眺めている――ように、久美子には感じられた。けれど、相手のほうが気まずそうに視線をそらす。やはり、島一番の網元の威光は絶大なのだった。それは、駐在勤務の警察官に対してさえも同じらしい。
港の手前にある駐在所で、久美子は呼び止められた。三十歳くらいの警官だった、
「裸で外を歩くとは……」

そこで、後ろの花江に気づいて、そちらへ問いかける。
「これは、いったいどうしたことです」
「この子は、見習海女になったんです。一人前になるまでは裸というのが仕来りなのは、駐在さんも御存知でしょう」
駐在は口を半開きにして花江を見詰め、久美子の裸身に目を転じてはあわててそっぽを向いたり、彼のほうが挙動不審だった。
「あれは、浜崎さんの地所内と漁のときだけに限って黙認しておるだけだ。このように公然と裸で闊歩されては……」
「裸のどこが、いけないんですか」
「公然猥褻罪になる」
「この子の裸のどこが猥褻なんですか？」
そんなことは子供でもわかる――と、久美子は思ったのだが。
「何年か前の裁判で、下の毛が見えなければ猥褻ではないという判決がありましたわね。だからこの子には、わざわざ剃らせているんです」
そういう目論見だったのかと、久美子は気づいた。花江の立て板に水は、伯母の入れ知恵だろう。医者は口実で、憎い妹の娘を満天下の笑いものにするのが真の目的だったと――久美子は暗然と悟った。
「いや、それは知っているが……毛よりも猥褻なものが、丸見えですよ」
ほほほほと、花江が作り笑いをした。
「お股の割れ目は、性器ではありませんわ。女の性器は割れ目の奥に隠れています。奥様

をお持ちのくせに、そんなことも御存知ないのですか」
「いや、それは詭弁というもので……」
「これは、女将さんの決められたことです」
ぴしゃりと言い放つ花江。
「ご自分でお米も野菜も作るおつもりですか。石鹸とか歯磨き粉は、どうなさいますの？」
網元の威光に逆らうなら村八分にすると、花江は脅している。
「せめて、外部の者の目には触れぬよう、それだけは、くれぐれもお願いします」
駐在は、苦虫を噛みつぶしたような顔で、奥へ引っ込んだ。
「つまらないところで時間を取られた。いちいち説明するのも面倒ね。こっからは、わてが先に立ってやるよ」
竹尺を襟首から着物の後ろに隠して、花江が歩き始めた。あわててついて行く久美子。後ろに目はないけれど、いつ振り返られるかわからない。久美子は、それまでと同様に、羞恥の根源を隠さないように努めた。
桟橋に定期船の姿はない。苦しいことや恥ずかしいことが次々に起こったけれど、まだ朝の十時前なのだ。
桟橋に面した家並みの大半は、何らかの店になっている。八百屋に肉屋、煙草屋、小さな郵便局、書店、雑貨屋、薬局、一膳飯屋、自転車店、床屋……魚屋だけは見当たらない。
全裸の久美子に声をかける者はいなかった。割烹着の婦人が浜崎家の女中だと誰もが知っているから、その背後にいる女将さんが怖いのだ。視線だけが、久美子に集中する。男たちの大半は好色な目つきで裸身を眺めている。それを感得できるくらいには、久美子も

性長している。女性の目は、三つに分けられた。憐憫、侮蔑、そして敵視。敵視というのは、母の昔の所業のせいかもしれない。

『後藤医院（外科・内科・小児科・産婦人科）』と掲げられた看板を通り過ぎて家並みの向こう側まで突き抜けて、右へ折れて坂道を登っていく。緩やかな段々畑の先にある農村まで引き回されて、村長に挨拶させられた。

「網元の浜崎様のお世話になる白石久美子です。自分の食べる分くらいは稼ぎたくて、海女さんになることにしました。見習のあいだは、こんなみっともない格好ですが、どうかお許しください」

道々考えて、花江に添削された口上だった。

「いやいや。やはり島の娘さんだねえ。伝統を守ろうとは、殊勝な心掛けじゃわい」

久美子のことは、あらかじめ教えられていたらしい。とっくに還暦を過ぎた老人は、久美子の乳房と股間との間に視線を往復させながら、取って付けたような挨拶を返したのだった。

別の道を下って桟橋へ引き返して、それから後藤医院へ連れて行かれた。

裸の胸にしつこく聴診器を当てられ、乳房を触診までされた。学校の定期健診で慣れて（はいないけれど）いるから、ちょっとしつこないと感じたくらいだった。

「肺の音はきれいだから、問題は無いと思いますよ。いちおう抗生物質を出しておきましょう。今日の昼と夜、念のために明日の朝の分まで出しておきます」

帰り際に、窓口でもめた。

「なんだって、こんなに高いんですか。保険証が使えない？　全額負担ですって？」

久美子は浜崎家の扶養家族になっていない。手続きが間に合わなかったのというよりも、これまでの経緯から考えると、家族に加えるつもりなんかないのだろうと、久美子は屈辱を重ねた。

「まあ、いいわよ。叱られるのは、勝手に溺れた久美子なんだから」

溺れたくて溺れたんじゃありません――と花江に言っても始まらない。あとで、ますます伯母の勘気をこうむるだけだ。

ボオオオオー。

「あら、もうこんな時間だわ。おまえがグズグズしてるからよ。すみません、裏口から出させてもらいますね」

花江は久美子を走らせた。隠していた竹尺を手に、尻を叩いて追い立てる。

「あ……？！」

トンッと足が地に着くたびに、久美子は股間を異様な衝撃が突き抜けるのを感じた。正確には――まだ赤い紐で括られたままになっている、昨日までは自分でもその存在を知らなかった小さな肉の突起が、鋭く疼く。痛いのではない。むしろ、甘美とさえいえる衝撃だった。

「もういいよ。ふつうに歩きな」

遠くから呼ばわれて、久美子は我にかえった。和服を着ている花江が追いつけないほどの速さで駆けていたのだ。

そのまま走り続けていたい誘惑を投げ捨てて、久美子は速度を落とした。歩くときでも意図的に足を強く踏み下ろせば、同じように甘い衝撃が生じるのだが。久美子は、そうし

なかった。この官能が淫らなものだという意識は無かったけれど。ズロースを履いていたら、この突起は揺れなかっただろう。紐で括られて充血していなかったら、刺激は受けなかっただろう。裸を強いられて、しかも恥ずかしい目印を付けられて。それで気持ち良くなるなんて、恥辱でしかなかった。

医院で予想外の出費があったことには、伯母は何も言わなかった。

「夕方の潮目で、また海に出るよ」

海女になると言ってしまったからには、きちんと練習をするつもりではいるが。

「学校へは、行かせてもらえないんですか」

ビンタも覚悟で尋ねた。

「まだ転校の手続きがすんでないんだよ」

引っ越した当日から通学できる制度になっているなど、久美子は知らない。そういうものかと納得しかけたのだが。

「言っとくけど、海女稼ぎができるようになるまでは、その恰好で暮らすんだからね。学校でも同じだよ」

「……！」

学校へ行かさないと言われたも同じだった。むしろ、行かされたらどうしようと、そちらが不安になってきた。

「ああ、そうそう。昼ご飯も恵んでやるけどね。食べ終わったら、小屋から出るんじゃないよ。子供たちが学校から帰って来る。そんなみっともない姿を見せたら、教育に良くないだろ」

街中を引き回す口実に、花江は「裸が仕事着」と言っていた。どうせ伯母の受け売りだろうが、今の言葉とは真反対だ。こちらが本音だとは、久美子にも察しはつく。

・亡母の遺骨が人質

『サネ』の紐は講の目印だから、外に出るときだけでよかった。海へ出る前に自分の手で紐を結べと言われて、それもありがたかった。激しく動いても何も感じないですむよう、調整できると思ったのだ。

伯母の言葉に反して、裏庭に子供が来る気配はなかった。久美子が海に出ている間に干されていた洗濯物を、京子という若い女中が取り込みに来ただけだった。

夏至が近いので日は長い。とても夕方と思えない明るさの中で、久美子は海女の練習に引き出された。紐は皮の上からゆるく結んでいたのだが。

「そんなんじゃ、すっぽ抜けるよ。きちんと剥いてきつく結びな」

結局、伯母にされたと同じ形にして、紐がすこし食い込むまで引き絞らされた。たちまち充血してきて、歩くのが難しい。鋭くて甘い刺激だが、気が散ってしようがない。

船溜まりには、誰もいなかった。

「こんな時刻に水揚げしても、朝までに痛んじまう」

今日の定期船に積めば翌朝の競りに掛けられるが、今ごろ水揚げしたら明後日の競りになってしまう。例外はエンジン付きの漁船だけだった。夕方に魚市場で直接に水揚げして、

夜になってから帰ってくる。
手漕ぎの舟は陸揚げされて、波打ち際にもやってあるのは一艘きりだった。その舟で、ふたたび久美子が櫓を握らされた。
「たんびに溺れられてたんじゃ、かなわないからね」
鎖が半分の長さにされて、両端は命綱でつながれた。
伯母が牛乳瓶を遠くへ投げると、久美子はプール授業でならったやり方で、足から海に飛び込んだ。トンボを切ると方向がわからなくなると気づいたのだ。舟の向きは、いつ変わるかわからない。もしかしたら、伯母がわざと櫓を操っているかもしれない。すでに久美子は、伯母の自分への憎しみだけでなく悪意も確信していた。
けれど、今度の鎖に悪意はなさそうだった。身体を水平にして水を掻くと前へ進むだけで、浮きも沈みもしなかった。今朝の練習で着想したとおりに、およその方角の左端を狙って進み、後ろの舟影をときおり振り向いて、絶対に牛乳瓶を通り過ぎたと判断すると、右へ十メートルほど進んでから船影に向かって引き返した。そうして、視界の隅に赤い色を見つけたのだった。
片手に牛乳瓶を持っていても、身体を立ててカエル足で泳げば、容易に浮上できた。
「ぷはああっ……はあ、はあ、はあ……」
大きく喘いでいるうちに、かえって頭が痛くなってきた。けれど、いつまでも休んでいては、伯母に叱られると思った。わずか一日で、久美子はずいぶんと卑屈になっていた。
「頭痛がするだろ」
伯母が言い当てた。

「わしみたいに磯笛が吹けないと、すぐにへばっちまうよ」
言うなり、今度は立ち上がって、牛乳瓶をずっと遠くへ投げた。
久美子は大きく息を吸って、すぐに潜った。時間が経てばたつほど、潮に流されて方角の見当が狂う。
息が苦しくなるまで探し続けたが、見つけられなかった。あとで伯母にビンタのひとつも食らうのを覚悟で浮上して、息を継いだ。それを二度繰り返してから、やっと赤い牛乳瓶を見つけた。それを持って舟まで泳いで返ると。
「上がってひと休みしな」
やっぱりビンタだと覚悟して舟に上がったのだが。
「おまえ、初めてにしちゃ上出来だよ。このぶんなら、夏までには半人前の半分くらいまでは行けるよ」
四分の一人前とはずいぶんな言い草だが、上出来だというのは誉め言葉だと受け取った。
その安心が、久美子に疑問を口にする勇気を与えてくれた。
「どうして、水中メガネを使わないのでしょうか？」
船溜まりの海女は水中メガネを持っていなかったし、望見したかぎりでは、裸眼で潜っていた。
「明治の初め頃に、水中メガネが流行ったそうだよ。おかげで、根が枯れかけたらしい」
遠くまではっきり見通せれば、水揚げが増える。自然に増える量以上に獲ってしまえば、自分で自分の首を絞める結果になるのだ。
「以来、水中メガネは御法度になったのさ。箱メガネが、ぎりぎりだね」

理屈に合っていると、久美子は得心した。腰の鎖のような意地悪ではない。伯母は海女褌のすぐ上に、分銅を連ねた紐を巻いている。それを言ったところで、見習海女は鎖が仕来りだと返されるだけだろう。

伯母が言う仕来りが、実は大昔の仕来りか、もしかしたらでっちあげかもしれないと――他の人たちの反応から、久美子は疑っている。それが証明されたところで、鎖と同じように、久美子は伯母の言いなりになるしかないのだけれど。

「さあ、いつまでも油を売っちゃいられない。今度は青いのを投げるからね」

海の色と同じだ。格段に見つけにくいだろう。けれど、それを見つけて舟に持ち帰るしかないのだ。久美子は、吸えるかぎりの空気を肺に溜めて、海に飛び込んだ。見つけるのは、思っていたより簡単だった。海底は明るい色の砂と黒っぽい岩が入り混じっている。鮮やかな青は、それなりに目立っていたのだ。

一度で見つけられずに息継ぎをしても、伯母は何も言わなかった。そのかわり、日が水平線に没するまで、二時間ほども練習は続けられた。五分ほどの中休みは何回か与えられたが、息を整えるのが精一杯で、疲れはどんどん溜まっていき、最後は歯がガチガチ鳴るほど身体が冷えていた。さらに、帰りもずっと櫓を漕がされた。

疲労困憊。櫓を漕ぐあいだ足を踏ん張っていたせいで、すぐには歩けなかった。

「近頃の子は、ろくに運動もしないからひ弱なんだよ」

船溜まりの砂浜にうずくまっている久美子を置き去りにして、伯母はひとりで帰って行った。

「今は七時半か」

伯母が海女桶に入れていた婦人物の腕時計で時刻をたしかめた。
「八時までに帰っといで。遅刻したら、晩ご飯は無いよ」
伯母の後ろ姿が夕闇の中に溶け込むと、久美子の両眼から涙があふれた。
食欲は無かった。けれど、今朝は朝ご飯抜きで練習をさせられた。これだけの重労働で、一日一食なんて、身体がもたない。
久美子は気力を振り絞って立ち上がり、痛むふくらはぎをかばいながら、よたよたと家路についた。
裏木戸をくぐって勝手口に行くと――沓脱石の上に、これ見よがしに空っぽの丼が置かれていた。
「ひどい……」
絶対に三十分も掛かっていないと思う。けれど、七時四十分くらいでも大雑把に七時半ということはある。そうだったのだろうか。それとも。久美子には正確な時刻を知る手段がない。どれだけ早く帰り着いても、伯母には久美子に食事を与えるつもりなどなかったのかもしれない。
久美子は伯母の言いつけを守って、手桶三杯だけで身体を洗った。最初の一杯で手拭いを使って、海水が乾いて肌にこびりついている塩をこすり落とし、二杯目で髪を洗い、海水に焼かれた喉を三杯目の水で潤してから、残りで身体を洗った。
小屋へはいって裸電球のソケットをひねって明かりを点けて。最初にしたのは、屈辱の赤紐を淫核（サネ）からほどくことだった。
ふっと目を落とすと、小さな母の骨壺が目に映った。昨日からずっと張り詰めていた気

持ちが、プツンと音を立てて切れた。
「かあさあああああん！」
久美子は机に突っ伏して、両手で捧げ持つようにして骨壺にすがりついた。泣いて。泣きじゃくって。それから、骨壺に語りかける。
「どうして、どうして、どうして……こんな非道いことをされなければならないの？　母さん。そんなに伯母様に恨まれるような悪いことをしたの？　それならそうと、どうして言ってくれなかったの。知ってたら、あたし、こんな所になんか来なかった。卒業まで、施設のお世話になってたのに……」
不意に。久美子の泣き声に研するような軋み音とともに引き戸が開いた。
はっと振り返ったときには、氷で作った能面のような顔をした伯母が、目の前に立っていた。戸口の向こうには、花江もいた。彼女が久美子の泣き声を聞きつけて、奥にいた伯母に注進したのだろう。
「こんな所とは、言ってくれるじゃないか。だけどね、こんな所があるんだから、どこの施設もおまえを受け入れちゃくれないよ」
身寄りの無い年少の子供を収容するだけで、施設は手一杯だった。ＤＶとか虐待の概念は無い時代である。扶養してくれる親族がいる者に、血税を投じてくれるはずがないのだった。
「それを寄越しな」
伯母が久美子の手から骨壺を奪い取った。
「こんな物を後生大事に抱え込んでるから、死んじまった母親に泣きついちまうんだよ。

こんな物、捨ててやる。いや、それだけじゃわしの腹が癒えない。金槌で粉々に叩き砕いて、海にまき散らしてやるさ」

「やめてえっ……！」

久美子は我を忘れて伯母にむしゃぶりついた。骨壺を奪い返そうとした。しかし。疲れ果てた華奢な身体が、ひとまわり以上も大きいうえに若い頃の海女漁で鍛えた頑健な肉体に太刀打ちできるはずもなかった。しかも、相手が復仇の妄念に燃えているのに比べ、久美子には母がほんとうに悪いことをしたのかもしれないという負い目があった。

伯母が久美子を片手で振り払って、骨壺を持ち去ろうとしている。

「待って……待ってください」

久美子は転んだまま土間を這って、伯母の足にすがりついた。

「もう、絶対に泣き言は言いません。養ってくださっている恩を仇で返すようなことは言いません。お願いですから、母を返してください……」

悔しいのか悲しいのか怒っているのか自分でもわからないままに、久美子は伯母の後ろ姿を見上げて、泣き声だけはかろうじてこらえたが、壊れた蛇口のように涙を流し続けた。

「口だけは、なんとでも言えるさ。舟を漕ぐのもグズ、潜っても一分と続かず怠けてばかり。人前ではろくに挨拶もできない。よっぽど甘やかされて育ったんだろうさ。こいつが、その元凶なんだよ」

今にも投げ捨てるとばかりに、骨壺を振りかざした。

「やめてください。明日から、もっと頑張ります。一生懸命潜ります。きちんと挨拶もします。お願いですから、今度だけは許してください」

伯母が骨壺を下ろした。氷の能面の下に、悪意の微笑が浮かんでいた。
「へええ。やっぱり、今日は手を抜いてたんだね」
あっと思った。思いとどまってもらいたいばかりに、伯母の言いがかりを認めてしまったのだ。
しかし。伯母は中へ引き返して、机の上に骨壺を戻してくれた。
「今度だけだよ。次に怠けたときは、問答無用で捨てるからね」
伯母も心の底までは鬼ではなかったのだと、感謝の念さえ浮かんだ。
父のお骨は御先祖様と一緒に白石家のお墓に眠っている。けれど、母にはお墓が無い。この家に来て、それがはっきりした。だったら、自分がお金を貯めてお墓を建ててあげなければならない。そういうふうに考えるのが、この時代では当然なのだが。だからこそ、お骨を捨てるというのは絶対に逆らえない脅迫になる。
久美子は、母のお骨を人質に取られたのだ。そのことに思い至って暗然としている久美子に、伯母の残酷な言葉が突き刺さった。
「次からのことは、そのときとして。今日の怠けていた分は、きっちり折檻しておかないとね」

・理不尽な折檻甘受

「京子さん……京子さん！」

伯母が若いほうの女中を大声で呼びつけた。勝手口に顔をのぞかせると。
「亭主を呼んどいで。このグズ娘に折檻をしていただくよ」
ひぐっと息をのむ久美子。樹から吊るして折檻。その言葉が、頭の中をぐるぐると駆け巡った。
「お願いです、女将さん。明日から心を入れ替えて頑張ります。折檻だなんて、恐ろしいことは赦してください」
自然と、久美子は伯母に向かって土下座していた。伯母の足元に額をこすりつけた。
貧相な伯父が、押っ取り刀で駆け付けてきた。事のあらましを伯母から聞いて、土下座を続けている久美子を憐れむ目つきで見下ろす。
「なにも、初日から折檻などと大仰な……」
「二日目ですよ。海に出たのも二回。最初はヘマばかりして溺れかけるは、さっきはさっきで、油を売ってばかり。あのふしだら女の娘ですからね、早いうちに身体に教えてやらなきゃ、後々なにをしでかすか知れたものじゃありませんよ」
「しかしなあ……」
久美子は、身を硬くして二人のやりとりを聞いていた。
「わかりました。女房のわしが亭主を尻の下に敷いているなんざ、女中に言いふらされちゃたまりません」
安堵の息を吐きかけた久美子だったが。
「あんたに代わって、わしがちょっとだけ躾けてやります。そこで見ていてくださないな」
いったん心を緩めただけに、久美子は気が遠くなりそうだった。伯母の言う躾は、折檻

と同じ意味だろう。
そうではなかった。
「躾か……やはり、叩くんだろ？」
「そりゃそうですよ。でも、折檻というのは、本人が嫌がろうと泣き喚こうと容赦しませんがね。躾てのは、本人が納得して自分から罰を願うのを言うんです」
そんな話は、聞いたことがない。けれど、なにを言っても折檻だか躾だかが厳しくなるだけだろう。
「そういうことだからね。おまえも心から反省してるなら、これまで怠けてきたことへの罰を受けて。すっきりしたいだろ？」
久美子は絶望のどん底で、心にもない言葉を紡がねばならなかった。
「はい……あたしが二度と怠け心を起こさないよう、躾けてください」
久美子は裏庭に引き出された。
勝手口からふたつの顔がのぞいている。ひとつは久美子と同年代の少年の顔。もうひとつは小学校高学年に見える少女。この二人に関心を持つどころではなかった。
「子供の見るもんじゃないよ。奥へ行きな」
「俺、そいつより早く生まれてるぜ」
「いいから、行っちまいな。おまえも、ちょいと躾けてやろうか」
ばたんと音を立てて、勝手口が閉じた。
「まったく、口の減らない子だよ」
母親の顔と声で愚痴を漏らしてから。伯母はすぐに鬼の顔に戻った。

「躾だから、樹から吊るすなんて可哀そうなことはしないよ」
伯母の手には竹尺が握られていた。
「自分から罰を願ったんだからね。逃げるんじゃないよ」
伯母が竹尺を振り上げた。
あんなもので頬を叩かれたら、鼓膜が破れる。そのまま海に潜らされたら中耳炎になる。
久美子は先回りして心配したが、まるで見当はずれだった。
ぶんっ……
久美子は思わず目をつむった。
パッシイン！
「きゃひゃあああああっ……！」
まったく思ってもいなかった場所で、鋭い痛みが爆発した。乳房を叩かれたのだと理解したのは、悲鳴を吐き出し終えてからだった。手の平で蔽いつくせないくらいまでに膨らんできた乳房は、シュミーズの裾がすれただけでも軽い痛みを感じるほど敏感になっている。そこを力まかせに叩かれたのだ。
久美子は両手で乳房をかばって地面にうずくまった。
「こら。逃げるなと言っただろう。手加減してやってるのに、ぎゃあぎゃあ喚いて。そんなに樹から吊るされたいのかい」
久美子は唇を噛み締めて、それから歯を食いしばって立ち上がった。膝が震えていた。
「もっと足を開いて踏ん張るんだよ」
言われるままに、足を開いた。それまで閉じ合わさっていた割れ目に、冷えた夜風が忍

び入る。しかし、そんなことに気を取られているどころではない。
「手は後ろで組んでな。よーし、それでいい。躾が終わるまで、手を動かすんじゃないよ」
伯母が逆手に竹尺を振りかぶった。
不意打ちを食らって見苦しい様を見せまいと、久美子は両眼を見開いて息を止めて、乳房が叩かれる瞬間に備えた。
ぶんっ……パッシイン！
「うぐっ……」
手で胸をかばわないでいるには、途方もない気力が必要だった。悲鳴をあげれば気力も萎える。
「ふん。なかなかに強情な子だね」
悲鳴をあげてもあげなくても、伯母の癪にさわるらしい。つまりは自分を憎んでいるのだと――久美子は絶望を深くした。
伯母が、また竹尺を振り上げた。
ぶんっ……パシイン！
斜め正面から叩きつけられるので、竹尺の先が薄い乳房にめり込む。
「ぐうう……」
どうにかもちこたえた久美子だったが。
ぶんっ……パシュン！
「ぎゃあああああっ……」
竹尺に双つの乳首を薙ぎ払われて、久美子は絶叫した。乳首を千切り取られたと錯覚し

たほどの劇烈な尖った痛みだった。禁じられてはいても、両手で胸をかばって膝から崩れ落ちた。

「さっさと立つんだよ。仏の顔も三度だからね。吊るすよ」

穏やかな仏様でも、三度も顔を撫でられれば怒る。つまり、つぎに姿勢を崩したら吊るすという意味だった。

震える膝を手で押さえ付けながら立ち上がった。いったい何発叩かれるのだろうと、それが怖くなってきた。けれど、尋ねたらとんでもない数を答えられそうだった。伯母が満足するまで、自分は虐められるのだ。もしも、どうしても樹から吊るして折檻してやろうと決めていたとしたら……

けれど。むしろ樹から吊るされたほうが……気力を振り絞って自分の足で立っているよりも楽なのではないかとさえ、思ってしまった。

それでも。久美子は立ち上がって両足を踏ん張り、手を後ろで組んだ。

ぶんっ……パッシイン！

ぶんっ……パッシイン！

ぶんっ……パシュン！

「あぐっ……ぐううう」

乳首への尖烈な激痛を常に覚悟していたから、ほんとうに打たれたときも、気絶しかかったけれど悲鳴は飲み込んだ。太腿まで震わせながらも、立っていられた。

「ふん。ずいぶんと素直になったね。今日のところは、あと一発で勘弁してやるよっ」

言うなり、伯母は竹尺を下から上へ振るった。

パンンッ！

「ぎゃあああああああっ……！」

久美子は両手で股間を押さえて膝から崩れ落ち、そのまま地面に転がった。乳首の痛みとは比べものにならない、全身を真っ二つに割られたような衝撃だった。ただ叩かれたのではなく、竹尺を刀みたいに使って、割れ目の奥まで斬りつけられたのだった。

乳房が焼けるように疼いていた。股間は痛いと同時に生温かな感触があった。

ようやく躾という名の折檻から赦された安堵で、久美子はそのまま気を失ってしまった。一時間ほどもして意識を取り戻したとき、おねしょをしていたことに気づいた。実のところ、股間を斬り割られた衝撃で失禁していたのだが、そういうことが起きるという知識が、久美子にはなかった。手で土を掻き集めて、濡れた地面を隠し、さんざん迷ってから裏木戸を出て海岸へ向かった。井戸のポンプを押す音を聞きつけられるのが怖かったのだ。

波打ち際で下半身を洗ってから。久美子は一時間以上も泣きじゃくっていた。

疲れ果てた身体で沖へ泳げば溺れ死ぬことができるのではないかと思った。小舟に積んである鎖を巻けば、確実だ。

けれど、久美子はその考えを実行できなかった。死ぬのはやはり怖かったが、それ以上に。母の遺骨を捨てるという威しが念頭にあった。そうされないためには、どんなにつらくても生きていなければならない。どれだけ虐められようと。自分が生きていれば、自殺なんかしなければ。いずれは、また母と一緒に眠れる。

卒業さえすれば島から逃げ出して、社会人として働けるようになると思い込んでいる久美子は、まだまだ世間知らずだったし――伯母の憎悪の深さを見くびっているのだった。